

飛鳥・藤原宮跡の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、1975年度の調査として藤原宮跡で、藤原宮北面中門を調査。藤原京跡で右京七条一坊、八条大路と西三坊大路の交差点付近等を調査し、藤原京条坊復原に貴重な資料を得た。また飛鳥地区では大官大寺の中門・南門地区を、和田庵寺では塔周辺をそれぞれ調査した。主な調査地域とその期間、面積などについては第1表のとおりである。

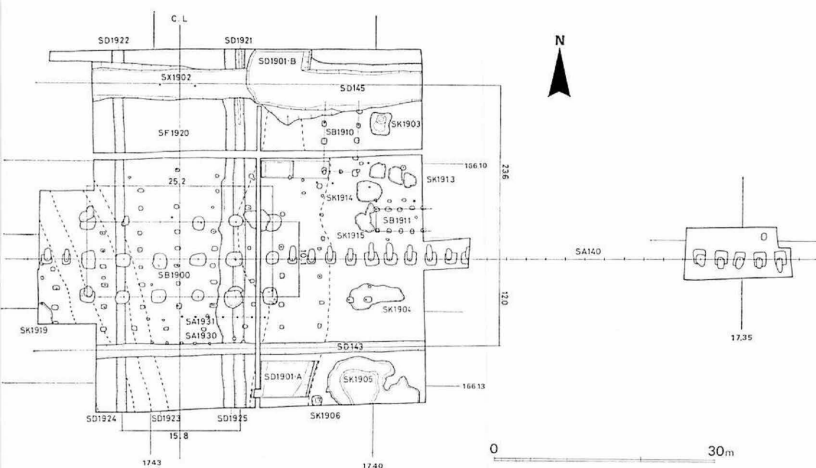
藤原宮北面中門 この調査は現在までの調査成果から推定される藤原宮の北面中門を検出して、その位置および規模・構造を確めること、またその成果と第1次調査として実施した宮南面中門の調査成果とあわせて現在なお不明確なままになっている藤原宮の中軸線を確定すること、以上の2点を主要な目的として実施した(口絵7)。

検出遺構は、藤原宮造営前(A期)、藤原宮期(B期)、その他にわかれる。

北面中門S B1900は桁行5間(総長25.2m)、梁間2間(総長10.1m)、柱間17尺(5.04m)等間の平面規模をもつ大規模な礎石建物であり、その規模は平城宮朱雀門にはほぼ一致する。後世の削平のため、基壇土や礎石据えつけ痕跡は全く検出されなかったが、礎石位置に限定された掘込地形の痕跡からその規模を知りえた。S B1900に伴う基壇やそれをめぐる雨落溝などの痕跡は全く遺存しなかったが、外壕S D145より凝灰岩切片が出土しているから、基壇化粧は凝灰岩切石で行ったものであろう。北門S B1900に伴う足場S X1899は、方60cm前後の掘形から成るもので、S B1900の柱位置の間にほぼその柱筋を揃えるものと、S B1900の外周をめぐる1列を検出した。柱穴には柱痕跡を残す例があり、また抜き取痕が全く認められないことから、基壇上面の化粧前にその上半部を切り落したものと考えられる。北面大垣S A140は北面

調査地区	遺跡・調査回数	調査期間	面積	備考
6 A J H	藤原宮第17次	75. 4. 3~ 6.14	26.2a	右京七条一坊
6 A J E	藤原宮第18次	10. 1~11. 4	26.0	藤原宮北面中門
6 A J E	藤原宮第18-1次	75. 6. 3~ 76. 1.12	1.2	
6 A J F	藤原宮第18-2次	75. 5. 2~ 5.10	0.3	
6 A J E	藤原宮第18-3次	75. 6. 4	2.2	
6 A J C	藤原宮第18-4次	75. 5.30~ 6. 2	0.18	
6 A J G	藤原宮第18-5次	75. 7. 3~ 7. 7	1.5	
6 A J F	藤原宮第18-6次	75. 8.11~ 9.17	0.3	
6 A J C	藤原宮第18-7次	76. 1. 8	0.03	
6 B M Y	本業師寺	76. 2.25~ 2.26	4.5	本業師寺西南隅、八条大路、西三坊大路の交叉点
6 B T K	大官大寺第2次	75. 1.22~ 2.27	28.0	中門・南面回廊
5 B W D	和田庵寺第2次	75. 5. 6~ 76. 1.30	28.6	塔跡
5 A T N	田中遺跡	75. 10.20~ 76. 4. 3	3.5	右京十一條一坊
6 B K H	川原寺	76. 1.14~ 3.	0.4	
6 B K H	川原寺	76. 1.12~ 1.14	0.1	下層暗渠の延長部
6 B K H	川原寺	76. 1.12		

第1表 1975年度発掘調査状況



第1図 藤原宮北面中門遺構図

時期	遺構	内容	時期	遺構	内容
A 期	SD1923	SD1922より古	B 期	SD1901A	SB1900, SA140より古, 瓦・木簡出土
	SD1924	SD1922より古		SA 140	北面大垣
	SD1925	SD1921より古		SD 143	内濠
	SF1920	朱雀大路計画線		SD 145	外濠
	SD1921	SF1920東側溝		SD1901B	
	SD1922	SF1920西側溝		SB1900	北面中門礎石建物5間×2間
	SB1910	南北棟4間以上×2間		SX1899	SB1900の足場
	SB1911	東西棟4間以上×1間		SX1902	橋脚
	SK1913			SK1903	木簡出土
	SK1914			SK1904	
	SK1915			SK1905	

第2表 藤原宮北面中門の遺構

中門以西で2間分, 以東で未調査部分を含めて26間分, 総長68.6mを検出した。柱間はややばらつきがあるが, 平均2.64m(9尺)等間に復原できる。なお調査範囲内では脇門に相当する施設は検出されなかった。内濠SD143はSA140の南12m(40尺)を流れる溝で, 幅1.5~2m, 埋土から大量の瓦と土器, 木簡が出土した。外濠SD145はSA140の北23.6m(80尺)に位置する幅4.5~5.5mの大規模な溝である。北流する南北溝SD1901Bに接続する部分ではSD145南岸が幅20mにわたり削られている。またSD145の北門SB1900の中央に対する位置には, 橋脚SX1902があり, 方20cm余の角杭を打ち込んでいる。このSD145の埋土からは瓦・土器・木製品と大量の木簡が出土した。3個の土壇のうち, SK1903からは, 瓦・土器に混って「鍔王」

・「猪使門」の二つの門号を記した木簡が出土した。これによって北面中門を猪使門とする有力な知見を得た。

北面中門・大垣・内濠の造営に先立って埋められた南北溝 S D 1901 A は、ごく一部を調査したに止まったが、やや蛇行しながら北流する幅 6～8 m の溝で、膨大な砂堆積からみるとかなりの水量があったらしい。これは宮中心部造営に関する溝と考えられ、下層より磨耗した瓦とともに木簡、手斧の削り屑などが出土した。この S D 1901 A が埋められた時期には後述の A 期の道路 S F 1920 の側溝は埋没していたようで、黒褐色の整地土が S D 1901 A の上層と S F 1920 の東側溝をおおっていた。ただ、S D 1901 A と S F 1920 とが一時期併存した可能性は残されている。なお S D 1901 A の S D 145 以北の部分は S D 145 の開鑿後もそれに連続する藤原宮の基幹水路の一部として使用されることになった (S D 1901 B)。

北面中門に重複して検出された南北道路 S F 1920 は、正しく宮中軸線上に位置しており条坊朱雀大路計画線の宮内延長部に当るものと考えられる。東西側溝間の心々距離 15.8 m、路面の幅員 15 m 前後を測る。この S F 1920 の設置時期は、藤原宮造営直前の 7 世紀の第Ⅳ四半期の中にあることが重複する南北溝 S D 1925 の遺物から判明した。

以上、今回の調査によって得られた知見を記したが、最後に過去の調査成果と合せて宮中軸線について述べる。国土地理院第 6 座標系による宮南門 S B 500 の中心位置は $X = -167, 021.1$ M, $Y = -17, 419.2$ M, 北門 S B 1900 の中心位置は $X = -166, 113.4$ M, $Y = -17, 426.3$ M, これから求めた宮中軸線は北で西に $26^{\circ}30'$ の振れをもつ。

藤原京右京七条一坊 この調査は厩原市営住宅建設に伴う事前調査である。調査地は日高山瓦

窯のある日高山丘陵に北接する。藤原京条坊の復原によれば、右京七条一坊の地で一部が朱雀大路推定線にかかる。従って調査目標を右京七条一坊の条坊地割と日高山瓦窯に関連した造瓦関係遺構の追求におき、七条一坊を東西に貫く形で東西約 260 m、南北約 6 m の発掘区と、日高山瓦窯に接する条間・坊間小路の交差する地点にそれぞれ発掘区を設定した。

調査の結果、西一坊坊間



小路の一部と坪境の塀、および井戸・溝・铸造炉跡・土境等を検出した。なお朱雀大路、西一坊大路の痕跡は見出せなかった。遺構、時期は藤原宮期に属すものと、それ以降のものにわかれるが、ここでは主体となる藤原宮期の遺構について述べる。

藤原宮期の遺構は、溝 S D1845・1856・塀 S A1855、井戸 S E1850・1860、铸造炉跡 S X1847・1848・1849などがある。南北溝 S D1856は幅50～70cmの素掘りの溝で、西一坊坊間小路西側溝と推定される。藤原宮第16次調査で検出した道路 S F1732に連なるものである。ただし小路の東側溝は検出できなかった。塀 S A1855は S D1856の西約1.5mに建つ南北塀で、中間未調査部を含めて27間分(59.3m)確認した。おそらく四坪の東限を画する塀であろう。東西溝 S D1845は幅1.2mの素掘りの溝で、七条条間小路南側溝の推定位置に一致する。ただし、対応する北側溝を検出していないこと、後述の井戸 S E1850等が道路敷推定地内にあることからみるとこれを条間小路とすることには問題がある。ただ発掘範囲が限られたこともあり現時点では明確ではない。井戸 S E1850、炉 S X1847～1849は七条条間小路の道路敷推定線上にある。井戸 S E1850は井籠組井戸で、内法が80×90cm、深さ1.5mの井戸枠5段が残っていた。井戸枠内部からは和銅2年の紀年銘のある木筒や忍冬文を型押しした軒平瓦、藤原宮式の瓦片などが出土した。S X1847～1849は铸造炉跡で、いずれも径50cm前後、深さ20cm程の土壇である。内面が強く焼け内部及び周辺から銅滓・焼土・木炭を検出した。近くから出土した鎔範の存在とあわせてこの一帯に铸造工房があったことをうかがわせる。なお、当初の目的の一つであった造瓦関係遺構は発見されなかったが、東西溝 S D1845の上層からは焼け歪んだ瓦や窯壁の一部、焼土・木炭等が多量に出土した。この殆んどは日高山瓦窯に近接した部分に集中しているから日高山瓦窯から廃棄されたものの一部であろう。出土遺物のうち日高山瓦窯に関連する瓦類について簡単に述べよう。従来、日高山瓦窯で焼成された軒瓦は6274Aが知られていたが⁵、これに加えて軒丸瓦6233A・6275 I・6279 A、軒平瓦6643Aが出土した。丸瓦・平瓦はともに粘土紐巻き上げ桶巻作りで成形し、凸面に縄叩き目と刷毛目を残す例が多い。

本薬師寺西南隅の調査 この調査は橿原市営住宅への進入路新設に伴う事前調査として行った。調査地は本薬師寺金堂跡の西南方約100mの水田で、調査では、藤原京八条大路と西三坊大路を確認し、本薬師寺に関連する遺構を検出した。遺構の時期は藤原宮およびその直前の2期にわけられる。

藤原宮期の遺構 八条大路 S F101の幅員は側溝の心々で、15.9mである。北側溝 S D104には橋脚の一部とおもわれる S X108がある。S D104からは木筒が3点出土し、うち1点は「伊□皮古」と判読される。八条大路 S F101と直交する西三坊大路 S F102の幅員は、側溝心々で15.2mとなる。東側溝

第3図 本薬師寺西南隅遺構図

飛鳥・藤原宮跡の発掘調査

	測	点	町	全	長	1町の長さ	1坊の長さ
東西方向							
A	藤原宮C.L.	～今回調査	6	790.0m		131.7m	263.3m
B	藤原宮C.L.	～藤原宮第7次調査	3	397.6		132.5	265.1
C	藤原宮C.L.	～藤原宮第16次調査	1	136.9		136.9	273.7
D	藤原宮C.L.	～本薬師寺C.L.	5	662.2		132.4	264.9
E	藤原宮C.L.	～大官大寺C.L.	7	933.3		133.3	266.6
F	藤原宮C.L.	～紀寺C.L.	3	411.9		137.3	274.6
G	今回調査	～藤原宮第7次調査	3	392.4		130.8	261.6
H	今回調査	～藤原宮第16次調査	5	653.1		130.6	251.2
I	藤原宮第7次調査	～藤原宮第16次調査	2	260.8		130.4	260.8
J	本薬師寺C.L.	～今回調査	1	127.8		127.8	255.6
南北方向							
K	今回調査	～藤原宮第7次調査	7	928.6		132.7	265.3
L	今回調査	～藤原宮第16次調査	9	1,196.3		132.9	265.8
M	藤原宮第7次調査	～藤原宮第7次調査	2			133.9	267.7

第2表 藤原京条坊計測表

S D105には2時期にわたる橋S X107A・Bがある。

藤原宮期直前の遺構 南北溝 S D110は堆積土のなかに本薬師寺所用瓦をふくみ、その西側の7世紀後半の土器を包含する整地土を切っているが、条坊地割の施工時点ですでに埋められ、整地されていることが明らかである。また、この溝の東側には地山の上に薄く、黄色土の積土が部分的にみとめられた。これを築地の痕跡とし、溝 S D110をその西雨落溝とみることが可能とすれば、本薬師寺の創建は条坊地割の施工に先立つことを意味する。

今回の調査によって、藤原京で初めて大路の存在を確認した。ここで、今回明らかになった西三坊大路心と本薬師寺両塔間中軸線との距離をみると127.8mで、これまでの調査で明らかになっている平均値として得られる半坊の東西長133m前後に比較して約5mも短かく、伽藍中軸線が西三坊の中心（西三坊坊間小路）に一致しない可能性が強い。これは本薬師寺の占地在条坊地割に先行するとみられる点からも十分考えられるが、逆に西三坊坊間小路自体が、本薬師寺伽藍中軸線にあわせてつくられた可能性もあり、今後の調査にその結論をまちたい。

なお、宮の中軸線は方眼北に対して西へ26°30'振れており、仮にこの振れが条坊でも一致するとして、1坊の長さを求めたのが第2表である。多少のばらつきがあるものの、1坊の長さとして265m前後の値が得られ、おそらくこの値が藤原京条坊の1坊の計画寸法を示すのであろう。伽藍中軸線との関係では、本薬師寺は先述の通りであるが、大官大寺の場合は伽藍中軸線が左京四坊坊間小路心に一致するか否かはさらに検討を要する。また藤原宮造営前の紀寺の伽藍中軸線は、条坊地割と無関係である。

最後に第2表に説明を加えておく。町は条坊制1坊の1/2を示す単位 of 仮称である。本薬師寺C.L.は両塔心礎の中心、大官大寺C.L.は講堂、紀寺C.L.は南門から求めた。なお、紀寺の資料は、榎原考古学研究所との共同調査の成果による。

大官大寺第2次調査 中門・南面回廊の確認と寺城南限の確定を目的に行った。検出遺構は、中門とこれに取り付く回廊のほか、下層遺構として掘立柱建物、井戸、土壇等がある(口絵7)。

中門 中門S B400は平面が5間×3間、桁行総長23.8m (79尺)、梁間総長12.6m (42尺)の巨大な門である。礎石据えつけ穴を割りつけると柱間は桁行中央間が5.1m (17尺)、両端間と

梁間の各間が4.2m(14尺)になる。基壇は掘込地形は行わず周囲一帯にわたる整地の後、2層ほど積土し、一部に版築がみられる。礎石は基壇築成の途中で掘形を穿って据え付けている。基壇上には焼けた足場穴SX101がある。さらに焼けた建築部材の落下痕跡SX105がありなかには尾垂木の痕跡(木口34×20cm)や肘木痕跡(木口20×20cm)とみられるものがある。これらことから中門は三手先の重層建築であったと考えられる。

回廊 回廊SC053は、中門東で6間分検出した。桁行3.9m(13尺)、梁間4.2m(14尺)の単廊で中門梁間中央間と柱筋を揃えている。中門との取り付け部は削平され礎石は抜き取られている。これより以東の回廊礎石はほぼ完存していることからみて、この部分は中門に向って

登り廊になっていたと考えられる。基壇築成、礎石の据え付けは中門と同様である。

中門・回廊ともに基壇化粧の痕跡が全く無く、雨落溝もみられず、未完成の段階で焼亡したことが明らかである。なお、南門を求めて中門の南方約100mの旧河床SD150までを精査したが検出されなかった。完全に削平されたか、旧河川で流失したか、あるいは中門・回廊が未完成であることから南門は未着工であったことが考えられる。

下層遺構 掘立柱建物2、塀2、井戸2、土壇3などがある。いずれも7世紀後半の土器を伴う。これらは全体としていかなる性格の遺構かは不明だが、大官大寺を含めたこの一帯を岡本宮に比定する説もあり、今後の調査の進展が望まれる。

中門・回廊の確認により、回廊南北長は外側柱間で約83m(276尺)、回廊東西長は140m程度に復原される。中門心と講堂心とを結ぶ伽藍中軸線は方眼北に対して約16'西偏し、岸俊男氏復原の左京十条四坊の中心線とは正しくは一致しない。最近判明した宮中軸線の西への振れ

第4図 大官大寺第2次調査遺構配置図

26'30''とはかなり異なる値であるが、下ツ道の平城京内での振れ約17'と近似するといったように問題は複雑である。その解決の緒口を握っているのが中ツ道の位置である。

和田庵寺第2次調査 橿原市和田町字トノダの水田中に存在する大野塚は、古くから寺院跡とされ、書紀にみえる大野丘北塔比定説や葛木寺比定説などがある。また藤原京朱雀大路推定線に西接しており、藤原京条坊との関係が問題となっている。1974年度の調査に続き今回は大野塚周辺に伽藍中心部を予想し、この地域を調査した。

調査によって検出した遺構は塔・築地・掘立柱建物・堀・井戸・土壇等があり、大きく4期に大別できる。すなわち、A 塔造営以前の掘立柱建物第Ⅰ期、B 塔の造営から廃絶まで、C 塔廃絶後の掘立柱建物第Ⅱ期、D 掘立柱建物第Ⅲ期である。これらの年代は、Aが7世紀前半、Bが7世紀後半から8世紀後半、Cが8世紀後半から平安時代初期、Dが平安時代前半頃にそれぞれ比定できる。次に塔跡を中心に記述を進める。

塔 調査によって塚上に花崗岩礎石3、根石2、礎石抜取痕跡3を検出し現存の塚は塔の基壇の西半部であることを確認した。基壇規模は基壇化粧の痕跡が残っていないためこの部分を除いて一辺が約12.2m（約41尺）に復原でき、間の柱間は約2.4m（8尺）等間となる。西側柱の2個の礎石はやや西に傾くがほぼ原位置を保つ。表面には円形柱座とその両脇に地覆座を造り出す。心礎は焼いて破砕し抜取られていたが、残存する根石からみて心礎上面高は四天柱及び側柱礎石の上面高とほぼ同一に復原できる。基壇の築成方法は旧地表を約40～50cm掘り込んで掘込地形を行っている。掘り込みの基底部に礫を敷きその上に褐色土・黒褐色土の混った土を約30cm版築し、再び礫を敷きさらに基壇上端まで版築する。塔の東南北は旧地表の削平が著しく、基壇の東面や南面では掘り込み基底部の礫が露出している。掘込地形と基壇の関係は、北面では掘込地形の外側まで基壇積土が延びている。基壇化粧は塔の周囲から延石とみられる凝灰岩切石が出土しているから、凝灰岩を使用していたと考えられる。

築地 塔の南側で東西方向に走る築地S A 215を約22.5m検出した。築地の南側には寄柱の礎石掘えつけ痕跡とみられる小礫を埋めた径50cm程の穴がある。柱間は3m等間で4間分残っている。寄柱をもとに築地基底幅を考えれば2.1m～2.4mとなる。

第5図 和田庵寺第2次調査遺構図

第3表 和田庵寺の遺構

軸線は方眼東西に対し東で南に約6度偏している。築地の時期は塔に伴う場合と、方位からみて掘立柱第Ⅰ期に伴う場合が考えられる。

掘立柱建物・他 塔、築地の他に掘立柱建物約22棟、塀4条、井戸1基、土壇1カ所などを検出した。これらは塔との関係や柱穴相互の重複関係、建物方位、柱穴の埋土や出土遺物によって3期に大別できる。これらの遺構の詳細は第3表に示したとおりである。

遺物は瓦埴類が大半を占め、他に土器類、陶硯、凝灰岩切石等がある。瓦埴類のうち軒瓦は大半が塔基壇上の攪乱土より出土し、整理途中の概数だが軒丸瓦は10型式161点、軒平瓦は7型式52点ある。

第6図 和田庵寺塔跡（西から）

第7図 和田庵寺塔基壇断面図

軒丸瓦は飛鳥から白鳳様式に及ぶが、全体の7割は山城高麗寺、法起寺出土例と同型式の複弁8弁蓮華文と川原寺創建瓦と同範の複弁8弁蓮華文瓦で、奈良時代に降る軒瓦はない。軒平瓦は、白鳳様式の瓦は少数で、8割以上は奈良後半期の6702型式が占める。土器は弥生式土器、土師器、須恵器、緑釉・灰釉陶器、青・白磁器、瓦器が出土し、施釉陶器や磁器はいずれも攪乱土中からの出土である。墨書土器には「大寺」と記した7世紀後半の土師器杯がある。

以上述べたように、今回の調査地区内では遺構が複雑に重複している。当初の目的であった和田庵寺の遺構は塔跡を確認し、築地S A 215がこれに伴う可能性を指摘し得るものの明確ではない。この他の伽藍についての手懸りは得られなかったが、軒丸瓦のうち3割は飛鳥末期様式の特徴を示しているから、塔に先立って別個の伽藍が建立されていたことはじゅうぶん考えられるところである。

田中遺跡 本調査は住宅建築工事に伴う事前調査である。調査地は和田庵寺塔跡の北方、約200m、馬立伊勢部田中神社の東方約100mの水田である。この付近は舒明天皇田中宮跡があったと想定され、藤原京条坊の推定復原では右京十一一条一坊にあたる。調査の結果、掘立柱建物1、塀1、溝1等を検出した。

南北塀S A 50は15間分、約31mを検出し、南北とも発掘地区外に続く。柱間は2.1mと2.4mがある。南北溝S D 055は塀S A 050の西約2.4mに位置し、幅約80cmの溝で17.5mにわたって検出した。埋土からは7世紀代の土師器・須恵器が出土した。建物S B 051は南北棟建物で桁行3間以上、梁間2間、柱間は桁行・梁間ともに2.1m等間である。以上の塀・溝・建物は同一の軸線方向をとり、また柱間寸法も共通することなどから同時期のものと考えられる。ただし、調査面積が小さかったために遺構の全体配置は不詳である。さらに、今回検出した遺構が田中宮跡に関連するものか否かについては、なお検討を要する。(金子裕之・千田剛道)

第8図 田中遺跡遺構図